

ハンサム・ウーマン 新島八重

奨励	三木 メイ [みき・めい]
奨励者紹介	同志社大学キリスト教文化センター専任講師 日本聖公会司祭
研究テーマ	キリスト教の実践神学（女性学、人間関係、牧会）

おのおの善を行って隣人を喜ばせ、互いの向上に努めるべきです。キリストも御自分の満足はお求めになりませんでした。「あなたをそしる者のそしりが、わたしにふりかかった」と書いてあるとおりです。かつて書かれた事柄は、すべてわたしたちを教え導くためのものです。それでわたしたちは、聖書から忍耐と慰めを学んで希望を持ち続けることができるのです。忍耐と慰めの源である神が、あなたがたに、キリスト・イエスに倣って互いに同じ思いを抱かせ、心を合わせ声をそろえて、わたしたちの主イエス・キリストの神であり、父である方をたたえさせてくださいますように。

(ローマの信徒への手紙 15章2―6節)

「ハンサム・ウーマン」

「ハンサム・ウーマン」というキーワードが、新島八重を象徴する言葉として使われるようになったのは、2009年からです。あるテレビ局の女性ディレクターが、八重の生涯を取り上げた番組のタイトルのために、「ハンサム・ウーマン」という、聞きなれない新しい言葉を考えだして使ったのが最初です。そのきっかけは、新島襄が婚約したころに書いた英文の手紙のなかに「八重はハンサムではないが、彼女の生き方がハンサムだ」という文章があったので、そこからとったようです。英語のhandsome にはいろいろな意味がありますが、おそらく「八重は美人ではないが、生き方が堂々としていてすばらしい」ということを、襄は伝えたかったのではないかと私は想像します。「ハンサム」という言葉は、英語では男性にも女性にも使われますが、日本では男性に対して使われることが多い形容詞です。ですから、「男勝りで凛々しい」というイメージも含めて、今の時代のなかで八重像を表現するために「ハンサム・ウーマン」という言葉を発明したのは、非常に面白い、うまいなと思いました。一方で、八重は悪妻だ、烈婦だ、と悪口を言われていたというエピソードもたくさんあり、そのような状況のなかでも、ひるまず堂々として一人の女性として生き抜いたその姿が、ジェンダー・エンパワーメント指数の非常に低い現代の日本の女性たちを励まし、勇気を与えてくれるのではないかと、そんな連想を可能にしてくれるキャッチフレーズです。

昨年(2011)の東日本大震災から半年ほど経ったころに、2013年のNHK大河ドラマ「八重の桜」の決定が公表されました。それまでは、新島八重個人に関する本はあまり出版されていなかったと思うのですが、世間の注目度は急上昇して、今年の春以降さまざまな著者によって八重の生涯に関する新刊書が次々と出版され、それぞれ少しずつ歴史的な視点が違っていたり、八重の捉え方が違っていたりして、私は大変興味深いと感じながら読んでいます。

会津での幼き日々

同志社を中心として考えると、八重は新島襄の妻、そして未亡人としての生涯をおくった人ということになるのですが、彼女がどういう人だったのかを理解するには、やはり会津時代の山本八重を知る必要があると思います。彼女が生まれたのは西暦では1845年12月1日(旧暦11月3日)。会津藩の砲術指南役だった父・山本権八と母・佐久との間に生まれました。この夫婦の間には6人の子どもが生まれたようですが、無事成人したのは17歳年上の兄・覚馬と四歳年下の弟・三郎と八重だけでした。八重は13歳のときのエピソードとして、「四斗俵(約60キログラム)を肩に上げ下げしていました」と語っているので、若いときから力持ちだったようですが、そもそもなぞ13歳の少女がそんな重い俵を担いでみようなどと考えたのだろうかと思議に思います。同い年くらいの男の子には負けないぞ、という気概があったのかもしれませんが。当時会津藩には藩の子弟を教育する「日新館」という学校がありましたが、そこで教育を受けるのは男子だけです。女子は入れません。男の子は10歳で入学を義務づけられていて、学問教育と武芸の訓練を受けたのです。また、藩の子どもの教科書である「日新館童子訓」というのがあって、これは女の子も小さいときから読み聞かされるので、八重は7歳のときにはすでにこれを暗誦していたそうです。この教科書では、3つの大恩に報いることで人の生涯は全うできるものである、それは、父と母への大恩、教えを説く師匠への大恩、そして藩主である主君への大恩である、この3つの大恩に報いるために自分を律して生きていくべきである、という趣旨の内容が長々と説かれているそうです。ある文献では、会津藩士とその家族が、鶴ヶ城に1カ月も籠城し続けて戦ったのは、この童子訓によって最期まで主君に対して忠義を尽くそう、という精神が培われていたからではないかと、書かれていました。

八重は晩年になってからも、会津の話をよくしていたそうで、「小さいころから教え込まれた精神は堅いものである」と語っています。しかし、その主君への忠義を守るために、多くの命が失われた戦争の悲惨さを目の当たりにした八重が、生き残った自分をどのように考えていたのだろうか、童子訓の教えにある考え方を後からどう思ったのだろうか、と私は想いをめぐらします。

砲術の訓練をする女の子

戊辰戦争が始まるよりも前、おそらくまだ10代のころに、八重は父や兄から鉄砲の扱い方を一通り習っていました。なおかつ自分から熱心に鉄砲を打つ練習をして、相当な腕前だったようです。当時の女性たちは、一般的には小さいころから裁縫を習って、着物が縫えるようになれば一人前と言われていましたが、八重は裁縫よりも鉄砲の練習することに熱心だったようです。10代の若い女の子が扱うにはとても危険な武器であるのに、父も兄もよく教えたものだな、と思います。「この子が男の子だったらよかったのに」と父・権八が嘆いたほど、八重は砲術に関する優れた才能をもっていたようです。彼女が20代のときに、白虎隊の一員の15歳の少年に、銃の打ち方を教えていたときのこと、彼が銃の音に驚いて目を瞑ってしまうので、「そんな卑怯者には教えられない」と言って叱ったということです。怖がらずに、標的を見据えろということですね。彼女は鉄砲の音にひるまないで標的を見定めることができたのでしょう。その姿は、実際の戦争の悲惨さや苦しい現実にもひるまないで、自分の道を探して生き続けた彼女の生き様に通じるものがあるように、私は思います。

鶴ヶ城での戦い

彼女の86年の生涯で、最も鮮烈な印象として残っていたのは、会津での戦争、戊辰戦争だろう、といわれています。晩年になってからも、八重は会津での思い出話をよくしていた、ということです。彼女が体験した戦争がどのようなものだったか、少しご紹介したいと思います。

1868(慶応4)年1月、鳥羽・伏見の戦いのころ、京都にいた八重の兄の覚馬は薩摩藩に捕らえられ、処刑されたのではないかとされていました。そして、八重の弟・三郎は負傷して江戸まで戻ってきましたが、故郷に戻る前に亡くなってしまいました。そんな悲しい知らせが相次いで会津に届きます。八重と山本家の家族たちはどのような想いでそれを聞いたのだろうか、と思います。非常にショックを受けただろうと思います。政府軍は同年8月23日には、八重たちが生活していた鶴ヶ城下にも攻め入ってきて、火を放ちました。城下町に半鐘が鳴り響くなかで、八重はお城とは別の所に避難しようという家族に、自分は決死の覚悟で入城すると主張します。そして、弟・三郎の形見の着物と袴を身につけ、腰には大小の刀を帯びて、最新式のスペンサー銃を肩に担いで入城しました。この日、会津藩関係者で自害したのは約230名、市街戦での戦死者は460名以上、約1000戸の家屋が火事で焼失したといわれています。そして飯盛山では、あの白虎隊の少年兵士たちが、自ら命を絶しました。

八重は入城後に断髪して、銃撃戦に参加しただけではなく、政府軍陣地への砲撃の指揮までとっていた、といえますから、男性と肩を並べてというより、男性の藩士たちが驚くほどの活躍ぶりだったようです。当時、会津藩の主要な戦力であった藩の兵士の多くは国境を守っていて、鶴ヶ城の守りは少年兵や老年の兵士と女性たちだけで、守備は非常に手薄だったのです。そのためか、武器をもって戦った女性八重だけではありません。薙刀(なぎなた)を持った何人もの女性たちが城外に出て行って政府軍と戦い、弾丸を浴びて戦死しています。この女性たちは、後に「娘子軍(じょうしぐん)」と呼ばれるようになりました。八重の父・権八も、この戦いのなかで戦死しました。八重は最期のときのために、城内の生き残った女性たちと自害する手順を打ち合わせて、懐にいつも短刀を入れていたといえます。しかし、遂に9月22日に白旗を上げて降伏し、23日に鶴ヶ城を政府軍に明け渡しました。そのときに八重はもし辱めを受けたら自害しようと思っていた、と語っています。そして鶴ヶ城明け渡しの前夜に歌を詠んでいます。「明日の夜は 何国(いづく)の誰か ながむらん なれし御城に残す月影」。戦いに敗れた悔しさと、これまで頑張ってきたのに、という虚しさを感じられます。とにかく、八重は生き残りました。八重、22歳の秋です。城を出て会津の町を歩き、戦死した人びとの多くの屍を目にしたといいます。暦はこの年に慶応から明治に変わっていきました。この敗戦を乗り越えてどう生きていくか、精神的にも経済的にも、彼女は苦しい現実に立ち向かわねばなりませんでした。

京都へ移り住む

戊辰戦争後に、最初の夫であった川崎尚之助と八重は離別しています。離別の理由は諸説あるものの不明です。八重は女ばかりになった山本家の家族と会津に留まり、尚之助は一時東京に捕らえられた後に、多くの会津藩士と共に下北半島に移住していきました。頼れる人がいなくなったと悲しみにくれている間もなく、食べて生きていかなくてはなりません。八重は米沢藩の藩士の家に奉公に出ます。家族を養うための出稼ぎです。

父・弟、兄も死んだ、そう思っていたでしょう。しかし、数年後になって覚馬が京都で生きている、ということが分かり、明治4年に母・佐久と覚馬の娘と共に、京都に移り住むことになりました。覚馬は、捕われの身でありながら、西洋に関する幅広い知識を基に、日本社会をどう変革していくべきか、そのヴィジョンを記した『管見』という文書を作成し、それが認められて、京都府知事のプレーンとなってさまざまな政策に関わるようになっていたのです。ところが、彼はすでに失明しており、脊髄損傷のため歩くこともできない状態だったのです。彼は、そういったさまざまな困難にもかかわらず、捕らえている側の人間をも感心させるほど、将来のあるべき社会のヴィジョンを描いた文書を作成することができる精神的な強さをもった人物でした。そして、キリスト教に対しては、多くの日本人がまだ警戒していた時期に、自ら宣教師と会って直接その思想・信仰について学び、感銘を受けるようにな

るのです。その宣教師が、新島襄と共に働いていたゴードンでした。そして彼を通じて新島は覚馬と出会って、京都に学校を設立する相談をすることになります。そして、八重は兄の紹介によって、ゴードンから聖書を学び始めたのです。

八重と襄

八重と襄の最初の出会いは、ゴードンが滞在していた京都の民家です。八重が聖書を学ぶために出かけていったときに、玄関で靴を磨いていたのが襄でした。しかし、八重は彼を宣教師つきのボーイだと思って挨拶もしなかった、というエピソードがあります。その後、八重は襄から聖書について学ぶようになりますが、最初はお互いパートナーとして意識はしていなかったといわれています。しかし、八重が当時の日本女性と違って、しっかり自己主張ができ、恐れずに堂々としている姿を見て、襄はしだいに魅かれていったようです。1875（明治8）年10月に婚約しましたが、八重はそのために、勤めていた公立の女学校の「女紅場」を解雇されてしまいます。キリシタン禁制の高札は撤去されていたとはいえ、キリスト教はまだ邪宗門として警戒されていたからだと思われます。そして、翌年1月2日に八重は洗礼を受けて、翌日3日に襄と結婚しました。

キリスト教と八重

八重の洗礼が結婚式の前日だったので、私は本当に八重自身の信仰的決断があったのだろうか、と初めは疑問に思っていたのですが、若い時代からこれだけ自分の意見をしっかりともっていた彼女が、誰かに言われるままになんとかクリスチャンになるはずがないな、と今は思います。そして、さらに封建社会のなかで悲惨な戦争体験をしてきた彼女には、主君に恩義を尽くせという、あの「童子訓」の呪縛から脱け出して、新たな生き方を示してくれたのが聖書であったのではないかと私は想像します。新島は、脱国する前に読んだ本を通して知った、人間の主君ではなく、天の神、目にみえない主なる神に仕えるキリスト教の教えに、驚いたと言っていました。八重も、人間ではなく目には見えない神に仕えるという生き方が、平和な社会を実現する希望となると感じていたのかもしれない。

そして、もう一つ私が思うのは、彼女が生き残りとしての罪意識をもって生涯を送ったのではないかということです。大震災のような自然災害で多くの犠牲者が出た地域では、このような「サバイバーズ・ギルド」、つまり自分が生き残ってしまったことの申し訳なさや心にもって生活している方々が多くおられます。ましてや八重の場合は、自ら決死の覚悟で臨んだ戦いで家族と多くの同胞を失って、自分は生き残ったわけですから、それは免れ得ない罪責感であったと思います。それを抱えて生き抜くためにも、聖書に記されたキリストの福音は彼女の心を動かしたのではないかと思います。ただ、八重の信仰、内面の世界を客観的に知ることができる史料はとても少ないそうです。しかし、私は八重の生涯を学びながら、そのように感じました。

「忍耐と慰めを学んで
希望を持ち続ける」

今日の聖書箇所ですが、パウロがキリスト教迫害の時代にローマの教会の人びとに宛てて書いた手紙の言葉です。「おのおの善を行って隣人を喜ばせ、互いの向上に務めるべきです。・・・わたしたちは、聖書から忍耐と慰めを学んで希望を持ち続けることができるのです。・・・心を合わせ声をそろえて、わたしたちの主イエス・キリスト・・・をたたえさせてくださいますように」。

八重と新島襄は、夫婦となってキリスト者としてこの聖書の言葉にあるように心を合わせ、希望をもち続けて歩んでいったのではないのでしょうか。同志社の発起人となったのは、覚馬と襄ですが、二人とも病弱でした。八重は覚馬が出かけるときには自分の背中に兄を負って人力車まで運んだといえます。また、襄が各地に伝道旅行して病気で倒れるたびに、八重はかけつけて看病しています。キリスト教がまだ日本社会に受け入れられにくかった時代に、多くの困難な問題や状況を乗り越えて、神様から与えられた使命を果たすために協力していった、そうした三人の歩みが、同志社創立とその後の発展につながってきたわけですね。彼らを通して示された、主なる神の豊かな恵みと導きに感謝し、その想いを、その精神を私たちも継承していきましょう。